

C.L. information

Vol.40 2014 年 9 月

特 集

- ◆ 特定外来生物「セアカゴケグモ」
- ◆ デング熱
- ◆ 食中毒情報



株式会社コントロール・ラボ

特定外来生物「セアカゴケグモ」

日本各地へと生息・被害が拡大している毒グモの1種「セアカゴケグモ」。今夏は静岡県浜松市を始めとして、愛媛県松山市、石川県金沢市でも新たに発見されており、大阪府や兵庫県の一部などでは定着が確認され、日本での発見から19年経った今も世間を騒がせ続けています。

セアカゴケグモとは

セアカゴケグモはオーストラリア原産の外来種で、日本では1995年に大阪府で初めて確認されて以来、34府県で確認されています（環境省外来生物対策室発表、2014年8月29日現在）。メスは体長約10mm程度（脚を除く）で全体的に黒く、背面に菱形が2つ縦に並んだような赤色模様と腹面に砂時計様の赤色模様が特徴的で、幼体やオスは色や形態が異なります。また、近縁なハイイロゴケグモと共に、特定外来生物に指定されており、生きた個体を持ち運んだり、飼育することは禁止されています。



図1 セアカゴケグモと卵嚢

（公益社団法人日本ペストコントロール協会）

刺咬被害と症状

セアカゴケグモは比較的小となしい種類ですが、素手で触るなど刺激を与えると咬む場合があります。神経毒の「 α -ラトリトキシン」を持っており、咬んだときに口器から毒を注入します。また、毒を持っているのはメスのみで、オスは無害です。刺咬被害は毎年6～10月頃に起こっており、今年も8月に大阪で小学生がプールサイドで咬まれるという被害が発生しています。咬まれた場合、直後は軽い痛みを感じる程度ですが、次第に痛みが増加し、腹痛、胸痛などが起こる場合があります。軽症の場合がほとんどですが、重症になると、嘔吐、発熱、高血圧、頻脈、リンパ節の腫れ、進行性の筋肉麻痺などの神経毒による症状が現れることがあり、抗毒素血清による治療が必要になります。このため、咬まれた場合はすみやかに医療機関で受診し、咬んだクモの種類がわかるように、できれば殺したクモを持参すると良いでしょう。また、現在のところ、原産国オーストラリアでは血清の開発前にセアカゴケグモの毒で死亡した例がありますが、日本での死亡例はありません。

生息場所と防除

生息場所としては、日当たりの良い暖かい場所で、様々な人工物の窪み、穴、隙間などに営巣します。具体的には、側溝の内部やその蓋の裏側、プランターの底、花壇の隙間、室外機、自動販売機の裏などが挙げられます。駆除には家庭用殺虫剤（ピレスロイド系エアゾール剤）が有効で、熱湯をかける、または靴で踏み潰すなど物理的な方法でも十分です。野外での作業時に軍手など手袋を着用すると刺咬被害の予防になります。また、現在のように生息域が全国に拡大した要因として、自動車、貨物、コンテナ、建築資材等に営巣したものが、人の移動や輸送などによって運ばれた可能性が指摘されています。よって、拡散防止のために自動車などに付着させて移動させないように注意する必要があります。また、もし発見した場合は素手で触らないようにし、近くの自治体に連絡するようにして下さい。



図2 セアカゴケグモの生息環境（側溝）

（公益社団法人日本ペストコントロール協会）

デング熱

8月末よりテレビや新聞などでデング熱に関するニュースが連日報道されています。日本でのデング熱の国内感染は長年発生していなかったため、今回初めて耳にされた方もいらっしゃるのではないのでしょうか？そこで、ここからは、デング熱について説明させていただきます。

デング熱とは

デング熱は、デングウイルスの感染による熱性感染症で、東南アジア、中南米、南アジアなどの熱帯や亜熱帯地域が主な流行地です。デング熱は、ウイルスを持った蚊に吸血されることで感染するため、ヒトからヒトへ直接感染することはありません。また感染しても発症しないケースも多いとされています。

デング熱の症状と治療

デングウイルスに感染すると、3～7日程度の潜伏期間を経て、38℃～40℃の発熱、頭痛、筋肉痛、関節痛などが現れます。これらのデング熱の初期症状は風邪やインフルエンザの症状と非常に似ているため区別するのは困難ですが、デング熱の場合は、発症後3～4日で全身にかゆみを伴う発疹が出現することが、特徴的な症状の一つとされています。発疹を含めたこれらの症状は、約1週間程度で回復します。ただしデングウイルスに感染すれば必ず上記のような症状が出る訳ではなく、発症しないケースも多いとされています。



図3 デング熱での発疹

現在、デング熱に対するワクチンや治療薬はありませんので、感染した場合は対症療法になります。

媒介蚊と予防

デングウイルスを媒介する蚊は、ヤブカ属のネッタイシマカやヒトスジシマカなど特定の種類だけです。特に、日本に定着していないネッタイシマカは、媒介能力も高いことから、最も重要な媒介蚊と言われています。ヒトスジシマカに関しては、日本のほとんどの地域（秋田県および岩手県以南）に分布しており、今回のデング熱の国内感染の媒介蚊であると推測されています。ただし、ヒトスジシマカのすべての個体がデングウイルスを媒介しているわけではなく、むしろ極めて稀であると考えられていますので、刺されたからといって過剰にパニックを起こす必要はありません。

ヒトスジシマカの幼虫は、屋外の雨水枡や、竹の切り株、水がめ、水受け皿、放置されたプラスチック容器、古タイヤ、空き缶などの水系に発生します。このため、庭の木陰や草むらでの作業、茂みのある公園などでの散歩、ハイキングなどの野外活動中に吸血される場合が多いです。また、ヒトスジシマカは、直射日光の当たる場所に積極的に出てくることはあまりなく、樹木の木陰や低木の茂みなどに潜んで待ち伏せます。対策として、蚊の吸血を避けるために草むらなどの蚊の多い場所に近づかないことや、やむを得ない場合は忌避剤の塗布や蚊取り線香の携帯に加えて、長袖と長ズボンの着用などが最も実用的です。



図4 ヒトスジシマカ

(公益社団法人日本ペストコントロール協会)

デング熱感染の動向

デング熱の感染者数は、世界的に過去数十年で増加傾向にあります。その理由として、都市部の人口増加や海外旅行者の増加、異常気象によるウイルスを媒介する蚊の異常繁殖などが挙げられています。一方、日本でのデング熱感染は、渡航履歴者は2010年以降、毎年200人程度確認されていましたが、国内での感染は1945年以来報告されていませんでした。しかし、2014年8月27日に埼玉県で海外渡航歴のない女性からデング熱の感染報告があり、69年ぶりの国内感染となりました。27日以降、連日のように感染者の報告が相次ぎ、9月8日現在で80人の感染者が確認されています（厚生労働省発表）。

調査の結果、最初に感染が確認された女性は東京都の代々木公園で蚊に刺されており、他の患者も同様の場所で蚊に刺されたことが確認されたため、代々木公園のデングウイルスを保有する蚊が原因である可能性が高いと考えられていましたが、9月5日には代々木公園に立ち寄ったことのない感染者が報告されました。

今後もこのような事例が発生する可能性があります。蚊に刺されてから3～7日程度で高熱、頭痛、関節痛などの症状が見られた場合は、デング熱の可能性も否定できないため、早めに医療機関を受診をするよう注意喚起がなされており、今後の動向についても注目していく必要があります。



図5 日本国内でのデング熱感染者数の動向

食中毒情報

8月に発生した冷やしキュウリによるO157食中毒患者は、最終的に509人まで増加しました。そのうち115人が入院し、5人がHUS（溶血性尿毒症症候群）を併発しました。今回の事件は、改めて浅漬けにおける食中毒の危険性を認識させられる事件となったのではないのでしょうか。

今月は、細菌、ウイルス、自然毒と様々な物質を原因とする食中毒が発生していました。ノロウイルスによる食中毒が早くも増加してきているため、冬季に向けて早めの予防対策の確認が必要です。また、8月8日にはチフス菌を原因とする食中毒が発生していました。チフス菌による集団食中毒は稀なことで、2000年に統計を取り始めて以降初の事例となっています。

(8/15～9/15 新聞発表分) 全国食中毒発生状況

原因物質	事例	感染者数
ノロウイルス	3	97
カンピロバクター	3	62
寄生虫	2	18
腸管出血性大腸菌	2	8
不明・その他	6	59

株式会社コントロールラボ

本 社 〒651-1211 神戸市北区小倉台7-1-7
 阪神事業部 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町2-4-15
 福岡営業所 〒816-0921 福岡県大野城市仲畑1-6-15-A棟3
 フリーダイヤル
0120-540-643
 URL <http://controllabo.co.jp>

TEL: 078-582-3575 FAX: 078-582-3576
 TEL: 078-858-6801 FAX: 078-858-6802
 TEL: 092-575-0630 FAX: 092-586-6321


 株式会社コントロールラボ


 エムテック衛生検査所